
またカフェで会う日まで

佐天 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

またカフェで会う日まで

【Nコード】

N6595S

【作者名】

佐天 葵

【あらすじ】

会社を辞め、フリーターとしてフラフラ生きていくことを決めたが、ただ、フラフラするんじゃない！
未経験の事をやろうと思い、飲食業を経験したことの無い主人公はカフェのアルバイトに応募。

右も左もわからない状態で、店長から言われた事を淡々とこなす。
初めのうちは、これが、飲食業の常識なんだ、と自分に言い聞かせていたが、徐々にこれはおかしいぞ、と思い、他アルバイトを巻き

込み、店長との戦いを繰り広げる物語。

プロローグ 「転機」

こんな会社辞めてやる！

そう思い立つのには、さして時間はかからなかった。なにしろ、ほんの数ヶ月の間に、系列店舗がどんどん閉店に追い込まれている状況だ。ここも時間の問題だろう。

世話になった上司も、リストラ、自主退職、様々な理由で会社を去っていった。

従業員は、社長、代表取締役部長、平社員の俺の3名のみ。

ここに留まる理由は、皆無だ。

様々な思惑、取り巻く状況、その他諸々は、また別のお話し。

今はただ、新しい場所での、これから訪れるであろう素敵な出会いに胸を膨らませる事としよう。

株式会社 カストラル 代表取締役社長 甲斐 俊介 殿

一身上の都合により、平成23年9月30日をもちまして退職します。

平成23年9月30日

佐天 葵

それからこれから

仕事を辞める、と同時にこの九州の地を離れる決意もした。生まれ故郷の静岡に帰るのだ。理由は、単純に当面は実家で呑気に暮らそう、と思っただけである。そのことを、ミクシーの日記で淡々と綴ったら、数日後には、送別会という運びとなった。もちろん会社ではなく、大切な仲間たちとの、だ。

フラフラと、地元静岡から逃げるように九州の大学に進学、就職。まるまる7年九州にいた。当然、多くの人達と関わりを持って生きてきたので、送別会も人数が集まり、自然と盛大なものとなる。

程よく酒も回ってきた頃合いに、皆が口を揃えて言うのは、「百年に一度の大不況って言われるこのご時世に自主退社だなんてバカだねえ。考え直したら？」の一言だった。

いい加減気の知れた奴らだ。良かれと思って言っているのだろうが、外面から見ると、事情は単純ではない。それにホイホイと、「やっぱ辞めません。」なんて言えるわけがないだろう。

言わずもがな、、互いにそれくらいは理解しあえる事ぐらいわかってる。酔いが回れば回るほど、皆の俺の決意への関心は薄らいでいき、くだらないバカな話に花を咲かせ、朝日と共に一人、また一人宴会の場を去っていった。

寂しくなったらまた来ればいいや。約1000kmの距離は、そんなラフな想い一つで、その遠さを感じさせなくなった。

別れは済ませた。この地に思い残すことはなくなった。始発も動き出す時間だし、そのまま帰ろうと思ひ、泥酔状態のまま駅へと向かった。

ネットカフェや、ビジネスホテルで酒を抜いてから帰ることもできたが、一刻も早く帰りたい理由があった。それは、何気なく口にした仲間の一言が事の発端だ。「今、もしオマエがお縄にいたら、

住所不定無職の佐天葵（25）って報道されるのな。」

会社を退社し、アパートを引き払い、転出届を提出した俺は、世間では住所不定無職という扱いである。ニュースとかで流れるアレだ。その響きがたまらなく嫌で、1秒たりとも長くこの状態を続けたくないという思いが、泥酔状態の俺を駅へと逸らせた。

「黙ってりゃ、俺だってそんな事気が付かなかつたのにな、あのバカが！」

独り言をブツブツ呟きながら、トボトボと駅へ向かった。思いだし笑いをするかのように、一人ニヤニヤとしながら。

それからとこれから2

2度の乗り換えをし、午後のティータイムを迎える頃には、目的地を通り越して着いていた。

東京に、、、

不十分な睡眠を取り、いくらかアルコールも抜けた。気を取り直して反対方向の新幹線に乗り込み、窓越しの景色を眺めながらただ漠然とこれからどうするか？と思いつけた。準備なんて何もしていない、そんな中具体的にどうするかなんて決められない。漠然としたものでいい、どうしたいのだ？と自分に言い聞かせていた。「どうしたい？」ただこの一言が脳内をグルグル回っていた。やがてドウシタイ？という言葉はゲシュタルト崩壊しかけ、結局今何を考えればいいのかをさらに考え、気持ちは何一つとして、方向性を決められぬまま、時間だけが過ぎていった。

目的地に近づくにつれて景色は、高層ビルが立ち並ぶ街並みから茶畑へと移り変わっていった。うつらうつらと船を漕ぎ出したが、大阪まで観光に行く予定はない。これ以上自分に呆れたくないのアイポッドの音量をマックスにし、筋肉少女帯の「元祖・高木ブー伝説」を眠気覚ましにしてこれからのことを再び考え始めた。

アバウトな1つの質問に対しては、アバウトな1つの答えしか出なかった。今まで俺が経験した事ないことをやろう。で、何するの？経験していない事なんていくらでもある。その中で何を選ぶ？どうやって決める？職種で？それとも新しい趣味を模索するの？インドでも行くか？

たった一つのアバウトな質問に、たった一つのアバウトな答えを見つけただけで、それまでには考えられないほど具体的な質問がいくつも溢れてきた。それに対して、一つ一つに具体的に答えられるほど、俺の頭はさして回転していなかった。

アイポッドの曲は進んでいき、筋肉少女帯の踊るダメ人間が流れ始めた頃、ようやく目的地である静岡に到着した。気分は最悪だ。

最初の一步を踏み出せば

実家に辿り着き、一言三言親父とやり取りをし、とりあえず自室でぐったりとなつた。ぐるりと一周室内を見渡し、「何も変わってね〜な〜。」と誰に言うわけでもなく呟く。変わったのは長い間ほつたらかした事によつて溜まりに溜まつた埃くらいだ。手入れも何もせず、本当にほつたらかした事がすぐうかがえた。しばらくの間、ゴロゴロとしていたが、かつて18年間住んでいた部屋だといふのに妙に落ち着かない。「自分の」という実感が湧かないのだ。なにせ、7年間のうちに帰省したのはわずか一度だけ。祖母の葬式に参列し、「仕事があるから」という理由でとんぼ返りしたきりなのだ。生まれ育つた家なのに落ち着かない感じが、早くも九州での住処であつた1kのオンボロアパートをノスタルジックに思い出させた。疲れているせいか考えもマイナスの方向に進む傾向にあるようだ、こんな状態で思いつめたつて何も生み出さないな、と思ひ足先に届いていた荷物の開封に勤しんだ。

ほどなくしてドアをノックする音が聞こえた。返事をする前にドアは開かれた。ノックする意味はどこにあつたのだろうか？まあ、訪問者は親父つてことぐらいはわかつていたから別に構いやしないのだが、デリカシーがないものだ。俺を見るなり親父は「飲みに行くか？」と言つた。「疲れてるから遠慮しとく。」と答えるものの、「いいから飲みに行くぞ！」と間髪入れずに俺に言い放つた。最初から俺に選択権はなかつたのだな、、、そもそも最初の誘いの意味はどこにあつたのだろうか？

わずか数十秒のやりとりを終え、問答無用で夜の繁華街に繰り出すこととなつた。前日の朝まで飲んだくれてた事に加え、長旅で疲れ切つた体に流れ込むアルコールはいつもの何倍にもまして強烈だった。

へべれけ状態になるのには大して時間も酒量もかからなかつた。せ

つかくの親子水入らずの時間は2時間足らずで強制終了する形となった。

気づいた時には自室のベッドの上だった。朝日が眩しすぎて、灰になるんじゃないかと思うほどであった。「吐き気がするほどロマンチックだぜ」と酒臭い息を吐きながら背伸びと欠伸をした。

10月だというのに、やけに冷え込む。布団から出たくない。二度寝したい。別にいいか、今の俺は、住所不定無職だし、焦ることもない。ん？住所不定無職？住所不定無職！そうだ！忘れていた。さつさとこの状態から脱却せねば！

閉じかけていた瞳を大きく見開きベッドから飛び起きた。九州からの転出の手続きをしただけで静岡への転入の手続きをしていない。仕事もしていない。住所不定そして無職、最悪の組み合わせだ。別に悪事に手を染めるつもりはないが、仮に天災に見舞われた場合、やはり「住所不定の無職佐天葵さん（25）」が、「」と夕方6時のニュースで全国のお茶の間に放送されるのであろう。続いて「瓦礫の下敷きとなっておりましたが、34時間後に無事救出されました。」と九死に一生を得た場合、住所不定無職と報道され、拳句の果てにボロボロの姿をカメラに収められるわけか。生き恥だ。死んだら死んだで、そんな紹介のされ方では死んでも死にきれない。東海大地震がすぐそこまで迫っているかもしれない。事は一刻を争うのだ。寝癖もろくに直さず2リットルペットボトルにわずかだけ残っていた天然水を飲み干し市役所へと向かった。

所定の手続きは、30分もかからず完了。無駄に焦っていた分、拍子抜けした気持ちと本当にこんな簡単でいいのか？という不安な

気持ちが入り混じっていた。しかし、実際に手続きを行なったという事実が、いくらか心に余裕を与えたのか、「まあいいか」というもののラフな調子を取り戻していた。

目的は果たした。気づけばどこへ向かうとでもなく見慣れていたはずの街並みを一つ一つ確かめるようにフラフラと歩き回っていた。

あまり人通りが多いとは言えない、平日の繁華街の大通りをキヨロキヨロしていると、「こんな店あったっけ？」という疑問が歩みを進める度に浮かび上がる。もどかしいのは、その疑問が、昔からその店は存在していたのに、静岡に住んでいた当時は気づかなかつたということか、本当に新しく開店した店なのか、の区別がつかないことだ。つくづく7年間の歳月の長さを実感させられた。

無常観に捉われ、どことなく暗い気持ちになりかけた時に、ティーンエイジャーの頃の記憶がかすかに脳裏によぎった。

「あそこだけは、なんも変わっちゃいねーだろ。」

目的地を明確にし、確かな足取りで向かうことにした。

深い堀に囲まれたその場所は、10分も歩くと左手前方に姿を現わした。多少景観は古ぼつたくなつてはいるものの、7年前と何も変わっていない。

江戸時代、徳川家康が往生した城は現代でも目に触れることはでき、堀にかけられた橋を渡り、一度中に入ると、緑豊かな木々に囲まれた風景が飛び込んでくる。公園、と銘打ってはいるものの、その敷地はあまりに広く、子供たちが戯れる遊具は一箇所に集められていて、他の敷地は舗装されたアスファルトの道でできている。多くの人に専ら通り道として利用されている。堀に囲まれた城であるため、城外周りを歩くより、城内を突っ切った方が移動距離は短いのだ。

目的地が近づき自然と早足になる。堀にかけられた橋を渡り、立

ち止まる。

「何も変わってね〜な。」

自室を見た時と同様の言葉を呟き、それまでの歩みとは対照的にフラフラとゆっくり歩きだす。少しずつ、ティーンエイジャーの頃の記憶を思い出しながら、深く息を吸い込む。この匂いは何も変わっていない。良くも悪くも変わったのは俺の方だ、そう思えるだけで目の前が明るくなった気がする。

周りが自分を置いて変わっていくというのは辛い。それは、人に限ったことでなく、街並みの変化でさえ、蚊帳の外、置いてけぼりといった孤独に近い感情を芽生えさせる。繁華街を歩いていた時に感じていたソレだ。

対して、好きな場所が好きな場所のままに居続けてくれた、という事実は、安堵の気持ちを生んだ。静岡の友人達とも疎遠になっていて、一人ぼっちで先も見えない状況の中でのこの事実は、想像以上に大きく俺の心を揺らした。と、同時に強がってはいたものやはり心のどこかで不安を感じていたということも思い知らされた。

「俺ってば大して強い人間でもないのな。弱い人間のつもりもないけど。」

事実を受け止めつつ、後ろ向きにならないよう一言自分に言い聞かせ、歩を進める。程よく公園内を見回したところで、中心部に当たる場所にあるベンチにポツンと腰かけた。タイトなジーンズのポケットから取り出したタバコは、クシャクシャになっていた。構わず火をつけ一息するや、空を仰ぐ。「さて、これからどうするかね。」ベンチの背に両手をかけ、流れの早い雲を目で追いかけてつづ夢想する。「ドラえもんのでいで、雲に乗れると思っていた時期があったな〜。大人になりやどうにか乗れるかもなんて考えたりもしたけど、どうにかなるどころか触れることすら叶っちゃいな〜な。」どうにかならぬものか、とタバコの灰を落とし、腕を組み考えてみた。

ん？違っただろ！今考えるのはそんな事じゃない！これからだ！こ・

れ・か・らのことだ！タバコの火を消し、気を取り直してこ・れ・か・らの事を考え直す。

「とりあえず、バイト探すか。」

本題の思案は10秒とかからなかった。よし！という掛け声とともにベンチを立ち上がり家路を急いだ。

家に着く頃には数冊の求人誌が手に握られていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6595s/>

またカフェで会う日まで

2011年4月30日13時35分発行